

氏名	戴 勇強		
学位の種類	博士（造形）		
学位記番号	第 D0002 号		
学位授与日	2019 年 3 月 20 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
論文題目	和文	明朝体における伝統的書体と近現代の書体についての造形研究	
	英文	A study of the designing of traditional, modern and contemporary Min-cho type	
審査委員	主査	准教授（研究補助教員）	長井 健太郎
	副査	教授（研究指導教員）	福田 秀之
	副査	准教授（研究補助教員）	渡部 千春
	副査	教授	美澤 修
	副査	准教授	山本 恵子

博士論文要旨

本研究の目的は、明朝体の成り立ちから発展という歴史的な視点を通して、明朝体の造形原理を再解釈することにより、明朝体における伝統的書体造形と現代の書体デザインにつながる方法について考察することである。

明朝体とは、楷書、および宋朝刊本書体を基に形成された、細い横線と太い縦線の水平・垂直的な構造、そして横線の終筆の三角形ウロコを基本造形とする印刷書体である。その基本造形は、三折法楷書造形を高度的に要約した結果、成立したものである。

本研究における伝統的な明朝体とは、主に 16 世紀から 18 世紀の始め（明朝中期から清朝初期）の整版印刷における明朝体（以下、伝統明朝体と記す）を指す。1716 年の清内府版『康熙字典』の書体に代表されるように、伝統明朝体は楷書造形を概括した結果として、肉筆書写の造形特徴を継承していた。しかし、19 世紀中期から 20 世紀初期にかけて中国と日本が近代化するにつれて、主流な印刷技術は、整版印刷から活版印刷へ移行していく。その結果、活字の造形が活版印刷の技術的な制約を受けることになり、楷書の肉筆書写による造形特徴は活字明朝体において弱体化、ひいては喪失されていくことになる。こうして近代以降は活字明朝体がより活字の正方形枠にふさわしい構成的な造形特徴となっていく。このように伝統明朝体と近代明朝体の間には造形原理上の差異が存在している。

一方、現代明朝体とそのデザイン方法論は、自動母型彫刻、写真植字、デジタル化などの印刷技術の革新、およびタイポグラフィの論理体系の影響により成長してきた。1950 年代以降の明朝体は、戦前の活字明朝体（主に築地系、秀英系の活字明朝体）を基に、幾何学構成、およびビジュアル原理によって、書体造形の改良が加えられ、より高い可読性と組版機能を持つ印刷書体となった。しかしその反面、伝統明朝体のような楷書の書写行為とのつな

がりを欠いてしまったというのが論者の見解である。歴史的な視点から見れば、印刷書体の形成は文字の書写行為、および書写の道具を造形の基準としていた。明朝体は楷書、宋朝刊本書体を継承した結果であり、その造形は漢字の文化と歴史につながっている。しかし、伝統明朝体の造形、歴史は近現代の書体デザインにおいて重視されてこなかった。明朝体のデザインは、漢字文化圏の文字造形の歴史の長きにわたる成り立ちと結び付けて考えられるべきである。

歴史研究から浮かび上がってきた、このような問題意識から考えられた制作課題は「美華書館・旧二号活字書体のリデザイン」である。アメリカ長老会が設立した美華書館は上海を拠点として、西洋の漢字活字とその制作技術を改良し、近代の活版印刷技術を中国と日本で普及したという役割を果たしていた。なお、近現代明朝体の集大成である築地体も美華書館の活字書体を改刻して得た成果である。美華書館の活字はすべて明朝体であり、サイズによって一号から六号まで分類されている（サイズは6種、書体は、二号が2種あるため7種である）。その7種類の明朝体は、制作時期や制作者によって、書体造形の特徴が大きく異なっている。1850年代から1860年代にかけてウィリアム・ガンブルによって制作された、より成熟した活字書体である新二号、五号、六号活字の書体造形は近現代明朝体の原型といえる。それに対して、1849年から1859年まで制作された旧二号書体は、非水平垂直の縦横線構造、およびアンシンメトリな書体骨格（主縦線、重心が右上に偏っている）の特徴によって、近現代明朝体の構造的な造形特徴というより楷書の書写行為を重視する伝統明朝体に近いのである。本研究はその点に着目し、旧二号書体のリデザインとして、新しい明朝体（上海明朝体）を制作した。それは旧二号書体の造形特徴をベースとして生かすことによって、楷書の書写行為による造形要素を取り込みうると同時に、現代の組版環境にも適用可能な明朝体である。

このように本研究は、伝統明朝体の造形特徴を現代の書体デザイン方法を結びつけることによって、漢字文化圏の歴史における文字造形の文化と現代のタイポグラフィ体系（文字デザイン理論と方法論）の間にあるディレンマを乗り越え、両者のつながりを探究した。そして、それらを新しい形へ導いたのである。

本論文における各章の概要は下記のとおりである。

第一章「序論」では、漢字文化圏の印刷書体の発展における伝統明朝体と近現代明朝体の造形原理と造形特徴の差異に注目して、可読性、機能性を重視した明朝体デザインが近現代の印刷書体の発展から成長してきたが、伝統明朝体における楷書の書写行為による造形特徴が近現代明朝体において喪失された問題を示し、過去の明朝体研究における近代書体一元論を指摘した上で、現代の明朝体デザインは漢字文化圏の文字造形の歴史の長きにわたる成り立ちをデザインの視点と結び付けて考えられるべきである観点を主張した。

第二章「明朝体の形成」では、中国歴史の各時期の碑刻、書跡、印刷物における文字造形を考察と比較したことによって、漢字書体の変遷と発展における隸書、楷書、宋朝刊本書体と明朝体の造形の関連性、および伝統明朝体の成り立ち、造形特徴、歴史位置について検討

した。明朝体の伝統的な書体造形は、漢字文化の歴史を内包し、その形成と成熟は、漢字印刷書体の機能性を充実させた上で、中国の印刷業と文化の発展を推進するという役割も果たしていた。ところが、実は19世紀以降、明朝体における伝統的な書体造形が喪失されたことによって、明朝体の造形は歴史的に過小評価されることになった。しかし、明朝体における伝統的な書体造形を、現代のタイポグラフィの視点から見直すと、そこには歴史的文化的価値があると考えている。

第三章「19世紀の近代明朝体」では、美華書館活字を中心に、19世紀における漢字活版印刷の近代化とそれによって成熟してきた近代明朝体について考察した。19世紀における漢字活版印刷の近代化は、主に西洋人の技術者や宣教師によって完成され、その過程は大きく分けると、1830年代の分合活字の試行錯誤から始まり、1860年代以降の電胎法活字の完成によって成熟し、1868年までの美華書館の一号から六号活字はその最終な成果といえる。漢字活版印刷の近代化において、製作効率や書体造形の製作難易度の角度から、楷書造形が完全に形骸化された明朝体は伝統明朝体より活字に適している。こうして近代の活字明朝体の発展は伝統明朝体の衰退に加速した。しかし、現代のタイポグラフィの観点からみると、組版の機能性と合理性に基づく書体の造形視点は、美華書館の活字およびそこから成長してきた号数システムによって成立した積極的な活動面も無視できない。したがって、19世紀における漢字活版印刷の近代化は、固有な楷書造形を基準とする漢字印刷文字の造形体系の衰退をもたらしたこと、および新しい組版の機能性と合理性に基づく近現代の印刷文字の造形体系の基礎を構築したという二重の影響があると考えられる。

第四章「近代明朝体の展開」では、近代における四号と五号明朝体における漢字の造形比較を中心に美華書館の活字明朝体から築地体と秀英体への改刻過程を考察し、近代明朝体である築地体と秀英体の展開が現代書体のデザインに与えた影響について検討した。日本における近代明朝体は、美華書館活字から数多い改刻を経て得た成果、明治の末期から大正の初期にかけて築地体と秀英体の改刻完成とともに成熟し、さらに中国への逆輸出によって漢字文化圏に横断した。近代明朝体の改刻の意義は、組版における汎用性、可読性、機能性といった明朝体造形の合理性を求めて繰り返し推敲した過程であるといえよう。したがって、築地体と秀英体の改刻の意義と方向性は、戦後のタイポグラフィ論理、書体デザイン方法論の重要かつ不可欠な基礎と言える。しかしその反面、近代以降の組版環境の変化は、伝統的な書体造形の衰退を導いた要因でもあるということをも主張してきた。こうした必然的な変遷をみると、どれだけ伝統書体の造形要素を現代組版環境における明朝体のデザインに取り込むことができるかという近代明朝体デザインの課題を引き出した。

第五章「現代明朝体とそのデザイン方法論」では、まず、戦後からの現代書体デザインの発展状況を考察すること、および将来性の視野の中で佐藤のタイポグラフィ理論体系を再考することによって、漢字書体形態の特殊性を分析することで伝統的な書体造形体系と現代デザイン理論とを繋ぐための共通原理を取り上げた。次に、書体造形の視認可読性、書体が多様な組版環境における汎用性などの現代デザインの合理性の視点と歴史を継承する文化

的な視点と結びつけて、標準明朝体の定義を確認した上で、弁証法的に現代デザインにおける伝統的造形を位置づけることの重要性を示し、歴史的な視点を踏まえた明朝体デザインが向かうべき方向性について明らかにした。最後に明朝体を中心にするデザイン理論を構築することとして、上述の内容を「書体造形論」にまとめた。

第六章「上海明朝体のデザイン」では、美華書館・旧二号活字書体のリデザインを制作課題とした「上海明朝体」のデザインによって、伝統明朝体の造形視点と現代の書体デザイン方法を結びつける可能性を検証した。「上海明朝体」のデザインは、旧二号活字書体の非水平垂直、非対称な書体骨格構造をベースとして、そこに楷書の三折法を基にしたエレメント造形を取り込む方法で制作を進めた。こうして制作した明朝体に、さらにファミリー展開を充実させ、異なる組版環境における書体汎用性の検証も行った。それにより伝統的造形特徴を含み持つ明朝体の現代における実用性も実証した。制作成果によって、第五章に提出した伝統的造形視点を踏まえた書体デザイン理論を検証した。

以上のことから、本論文は、漢字書体歴史の考察、タイポグラフィ理論の構築、制作課題の実践によって、伝統的書体の造形視点を現代書体のデザインにつなげることが可能であることを実証し、本論文によって現代タイポグラフィをより深く漢字文化圏の固有文化と結びつける書体造形理論として提案したい。

審査要旨

戴が行った本研究の目的は、明朝体の成り立ちから発展、という歴史的な視点を通して明朝体の造形原理を再解釈することにより、伝統的書体造形を基に現代の書体デザインにつなげることにある。成り立ちから発展、造形原理について先行研究を行い博士論文にまとめ（第一章～第五章）、博士制作ではそこから得られた独自の書体造形の方法論を基に「上海明朝体」（第六章）を制作し成果として示した。

博士論文は、新たな明朝体の創作をテーマとする博士制作を理論的に支え、またその制作過程を綿密に示すために書かれたものである。論文においては明朝体に関する先行研究が丹念に辿られており、研究の方法を先行研究から正確に得ていることが確認できる。またその内容においては明朝体の歴史を、日本・中国、その他諸外国の動向やそれに関する文献を基に、明朝体形成期における手書きの特徴とその背景、近代アジアに活字が入り定着するまでの経緯と漢字活字製造方法の変遷、現代＝モダニズム期における合理的な書体製造方法を技術面、社会背景面から分析した。その結果明らかになった伝統明朝体、近代明朝体、現代明朝体間の差異を、技術的な視点と審美的な視点の両面から捉え直すという独自の視点を得るに至った。以上の点を中心とする成果から、制作研究を支える理論研究として十分な内容であると判定した。

博士制作においては、先行研究から得た形状における数値の傾向と、「ヒューマニズム」の社会的、心情的な要素を交ぜながら実践に取り組んだことで、整合性のある書体を作成す

ることが可能となった。「上海明朝体」と称するその書体は、近代の活字化、モダニズム全盛期の 50 年代 60 年代における均質化、合理化を経て、衰退していった伝統明朝体形成期における手書き文字のヒューマニズムを、現代の明朝書体に取り戻す試みでもある。制作過程においては、先行研究から得られた具体的な形の差異をもとに、書体造形における様々なアプローチを試行し、検証を行った。そこから骨組みを作り、ディテールを調整しながら、質の高い新しい明朝体のデザインに昇華させている。最終的に展示された書体見本、それに至る資料や図表、その書体を用いたポスターなどの質も高く、また多角的な研究の試みとして、タイポグラフィのコンペにおいて複数の受賞・入選という結果も残しており、制作研究においても優れた成果を得たと認められる。

デジタルフォント全盛の現代における時代的位置づけの定義や意義、また書体デザイナーとしてどのような媒体や使われ方を意識しているのか、可読性の検証（かな書体との組み合わせ方）など、課題はあるものの、識者との交流や希少な資料の蒐集など、研究対象に真摯に向き合い、考え、行動する姿勢も高く評価されるべきものとする。審査委員会として以上を総合的に勘案し、戴の論文、制作が博士（造形）の学位を授与するに十分値するものと判断した。